

論語からのメッセージ

高橋 貞夫

私は、会津藩校日新館で月一回開かれる論語素読会に参加している。県内外から、三、四〇人の人が集まり、高木厚保館長の熱心な指導で、論語の素読・解説から、その英語訳、中国語読みまで習うので、東西の文化を同時に学ぶような気持である。

論語を基底とする儒教は、徳川幕府の官学として採用され、明治以降も道德倫理の根幹をなしてきたため、忠君愛国を謳い、家父長制を支える封建思想とのイメージが強く、戦後は全くといってよいほど軽視されている。

「儒」の字が人をうつるおすことを意味するように、儒教はもともと、事物に即して真理を窮め、心を正し、学を修め、世の中のために盡くすことを主眼とする優れた人間学なのである。

しかし論語はわずか二〇編で構成され、現代のような複雑な社会に対応して、人がいかに生きるかのすべての指針を与えてくれるわけでもないのです。このことを長い間問い続けてきた西欧の哲学にも学ぶ必要がある。

哲学は、前五世紀の頃ギリシャに起つたが、「哲学は疑いとともに始まる」といったソクラテスの言葉にもあるとあり、始めは世の中に存在する万物が対象であった。人間の本性について、国家とは、善とは悪とは、正義、義務、言葉についてなど社会の仕組みや人間の営みにかかるものから、宇宙、物体、原子、数理と

自然界に存在するものも哲学の領域であった。一九世紀になって自然科学の分野は、物理、化学、生物学、医学などへ専門化していくが、ピタゴラスの定理、デカルトの座標、ユークリッドの幾何学など今も使われているとあり、当時の哲学者は一流の自然科学者でもあった。

弁論術を教えることを職業としたソフィストに準備され、ソクラテス、プラトン、アリストテレスに始まった哲学は、その後デカルト、カントと続き、『パンヤ』を書いたパスカル、『精神現象学』のヘーゲル、『人間本性論』のヒューム、『法の精神』のモンテスキュー、『ツアラストラはこう語った』のニーチェ、『存在と時間』と多くの哲学者を輩出し、『万物は流転する』（ヘラクレイトス）、『我思う、ゆえに我有り』（プラトン）、『存在するものは合理的である』（ヘーゲル）などと数々の至言を残した。

このように哲学者の判断を言葉に表したものを「命題」というが、論語に書かれた言葉と哲学者の命題とに共通するところが多いのも面白い。一、二の例を挙げると、論語の為政論に「心の欲する所に従えども短を踰えず」とあるが、これをパスカルは「汝の意志の格律が、いつも同時に普遍的立法の原理として働く」と述べる。論語の冒頭の学而編の初めに「学びて時に之を習う、また説はしからずや」という有名な言葉があるが、カントは『純粹理性批判』の中で、「人間とは自己開発する存在である」と書く。

論語は孔子と弟子との対話の形で書かれているが、西洋哲学でも対話が重視された。プラトンは、その著書のすべてを対話形式で書いたことで知られているが、

大部分に師のソクラテスを登場させ、当時のいるいるな立場の人を対話者を選んで、問答 させることにより真理を究明していった。この対話の伝統は、その後多くの哲学者に受け継がれていった。ガリレオ・ガリレイの『新科学対話』もそうであり、ヘーゲルは、『方法序説』の中で弁証法を唱え、一人の主張 それへの反論 二人の納得という、いわゆる正・反・合の議論により真理は証明できるとし、マルクスに受け継がれた。

テレビで草稿を持たずに聴衆に語りかける欧米人の演説を見るが、書いたものでは相手に答えられないとするこの弁論技術の延長なのである。

論語も西洋哲学も、複雑に変化する現代の社会において人はいかに生きるべきかの十分な解答は持たないかも知れないが、人間社会が続く限り永遠の課題として残るものであり、書物を繙きながら、それを真剣に考える姿勢こそ、今求められている。

高橋 貞夫（たかはし・さだお）

一九三四年、茨城県稲敷郡美浦村生まれ。

早稲田大学法学部卒業。県立医科大学事務局長、福島県土地開発公社専務理事等を経て、現在、若松ガスグループ顧問。

『阿武隈の歳時記』、『ふくしま海の歳時記』、『あいづ祭り歳時記』などの著作がある。